

シャーリカナータの誤知論 ——区別の無把握を中心として——

市 川 直 史

0. 問題の所在

プラバーカラ派（以下、P 派と略す。）の誤知説は「akhyāti 説」（以下「A 説」と略す。）と呼ばれるが、これについて解説した信頼すべき従来の研究としては Hiriyanna [1926] がある。それによると、A 説はミーマーンサー学派が採る「知識の自律的妥当性 (svataḥprāmāṇya)」という見解との徹底的な一致を目指し、誤知の存在を基本的には認めない認識論を展開し、全ての認識は対象通りであるとみなす¹⁾。一方いわゆる誤知については不完全な認識にすぎず、積極的な意味での誤った認識は存在しないと説明する。たとえば貝殻を見て「これは銀である」という時、貝殻については知覚された「これ」という認識が生じており、「銀」に対しては想起が起こっている。これら 2 つの認識はそれぞれ不完全な部分を持つものであり、さらにはそれら 2 つの認識間の識別が知られていないという点でも不完全な認識とされる。つまり「これ」という認識に関しては、認識の対象物を他の物から峻別するための「貝殻性」等が認識者自身に知られておらず、一方「銀」に対する想起については「想起であるという事実」が知られていない²⁾。このように不完全な想起や知覚知を導入することによって錯誤現象を説明付け、単一の誤知となってしまうことを回避するのが A 説の眼目である。

「全ての認識は対象通りである。」ということを論証するために、A 説では smṛti-pramoṣa（「想起脱落」）、bhedāgraha（「区別の無把握」以下 BhA と略す。）という 2 つの注目すべき概念が使用される。特に BhA は全ての錯誤現象の説明付けに何らかの形で用いられており、A 説にとって欠くべからざる重要な概念であると考えられる。本稿では P 派を代表する学匠シャーリカナータ (Śālikanātha, 以下、Ś と略す。) の、*Prakaraṇapañcikā*（以下、PrP と略す。）第三章 Nayavīthī 章（以下、NVī と略す。）の議論を分析し、Ś の BhA の特質を伺う。

1. NVī における BhA

NVī は、「主題の宣言と対立主張の導入（第 1-2 偈）」、「対立主張者による A 説

批判 (第 3-22 偈)」、「定説者 (P 派) の主張 (第 23-75 偈)」という構成を持っており、anyathākhyāti 説論者であるバツタ派或いはニヤーヤ学派からの批判に対して逐一答えることを通して A 説が説示される。NVi では数種の錯誤現象が実例として挙げられるが、それらの中で「貝銀知 (śuktikā-rajata-jñāna)」がモデルケースとされ A 説の論証がなされている。以下で Ś がどのように BhA という概念を運用し、貝銀知を説明づけているのか見ていく。

■ 1. 実際は貝殻であるはずのものを発見するが、この段階では貝殻と銀に共通しない性質 (bheda, asādhāraṇarūpa), すなわち貝殻と銀とを区別する性質である「貝殻性」等の性質は認識されておらず、「キラキラ輝くもの」という「共通性の知覚知」だけがある。つまり、貝殻と銀という対象間の「区別」の認識がない³⁾。

■ 2. 次に「共通性の知覚知」に基づいて過去の銀の知覚による潜在印象が喚起され、銀を対象とした想起が生じる⁴⁾。対立論者は「想起ではなく貝殻を対象とした誤った知覚知である。」と批判するが⁵⁾、それに対して Ś は「顕現しているものが認識対象であり、それ以外ではありえない⁶⁾」という P 派の認識対象の定義を持ち出しこの想起の対象が銀に他ならないことを論証している。

■ 3. 2. で生じた銀の想起は想起として完全なものであるとは言えない。というのも想起とは過去のことを思い出すことであり、「あれは銀だった。」というような形をとり生じるものである。しかしこの銀の想起は「あれは ... だった。」という部分を失っている。つまり過去のものとの再認識であるということを認識者は知らず、今現在知覚されているものであると考えてしまっている。従って想起の対象である銀と眼前の貝との区別がないとされる⁷⁾。

■ 4. そして 2. で生じた銀の想起は銀を対象とするという点で「正しい銀の知覚知 (samyag-rajatabodha)」と同様である。つまり (貝銀知における)「銀を対象とする不完全な想起」と「正しい銀の知覚知」との間には「銀を対象とする認識であること」という共通性が存在し、認識者はそのことを知っているがその両者の間の区別を知らない⁸⁾。そして「銀を対象とする認識であること」という共通性の認識と「正しい認識と不完全な認識との 2 つの認識間の相違を知らないこと」という BhA に基づいて、認識者は貝銀知を「正しい銀の知覚知」と同一視している。

■ 5. このような、貝銀知と「正しい銀の知覚知」との同一視 (= 別異性の認識の欠如) に基づいて認識者は「正しい銀の知覚知」の場合と同様に「これは銀である」という言語表現 (vyavahāra) を用い、それに基づき行為発動するが徒勞に

(266)

シャーリカナータの誤知論（市 川）

終わり、結果として錯誤現象であることが帰結する⁹⁾。

小結

以上のようにして Ś は貝銀知を誤った単一の認識 (ayathārtha-jñāna) とすることなく錯誤現象として説明づけ、NVī 章の冒頭偈で宣言された「この世のまさに一切の認識は対象通り (yathārtha) である」という P 派の主張を擁護している。

以上の分析の結果、NVī の論証中で Ś が用いる BhA には次のような種別があると考えられる。このような分類を、NVī 中で Ś が明示的に行っているわけではないが、次項でふれる NVTṬ, NSi の記述に基づき分類した。

A. 対象間の BhA (arthayor bhedāgraha) 〈27-29 偈 abc〉

B.1. 不完全な認識間の BhA (jñānayor bhedāgraha) 〈33 偈 cd〉

B.2. 正しい認識と不完全な認識との 2 つの認識間の相違を知らないこと 〈35 偈〉

2. 結びに代えて

NVī において Ś は少なくとも 2 種類の BhA を念頭に置いているが、他学派あるいは後代の著作中に見られる平行した内容の議論では以下のような形で BhA という用語が用いられている。

[NM, vol.1, p.463, ll.8-9] smaraṇānubhavayor ... vivekāgrahaṇam

[NVTṬ, p.74, l.26] grahaṇasmaranayos tadgocarayoś ca bhedāgrahād

[NVTṬ, p.74, l.27] agrhītabhedam svarūpato viśayato vā

PrP に先行する、あるいは地理的な要因により Ś の著作を参照していないといわれる NM には smaraṇānubhavayor vivekāgrahaṇam (想起と直接経験との BhA) とあり「対象間の BhA」は別立てされていない。一方、PrP より年代が下るとみられる¹⁰⁾ NVTṬ には「対象間の BhA」と「認識間の BhA」の 2 つが別立てされる形で述べられている¹¹⁾。このことから、「対象間の BhA」と「認識間の BhA」の 2 つを別立てし、より精緻な体系を「BhA」にもたらしたのが Ś であった可能性が示唆される。

ここで、従来の研究を振り返ると、M. Hiriyanna は「2 つの認識とそれらの対象との間の BhA から錯誤現象は起こる。」と述べているが、Ś が BhA を複数段階に分け運用していたことには言及しない。また、Schmithausen [1965]¹²⁾ では「2 つの対象間の BhA に起因し 2 つの不完全な認識間の BhA が起こり、正しい認識との BhA により錯誤現象が起こる。」と述べられているが BhA を分類し分析することには重点がおかれていない。

BhA はプラバーカラの *Bṛhatī* に始まり、後代の綱要書まで一貫して使用される A 説の中心概念であるが、Ś は BhA を 2 種、3 段階に分けて運用していたと考えられ、それが彼の独創であった可能性を指摘して結語とする。

〈略号〉 NM: *Nyāyamañjarī of Jayantabhaṭṭa with Ṭippaṇi — Nyāyasaurabha* by the Editor. Ed. K. S. Varadācārya. 2vols. Mysore: Oriental Reserch Institute, 1969, 1983. NVTṬ: *Nyāyadarśanam with Vātsyāyana's Bhāṣya, Uddyotakara's Vārttika, Vācaspati Miśra's Tātparyaṭīkā and Viśvanātha's Vṛtti*. Eds. Taranatha Nyaya-Tarkatirtha and Amerendramohan Tarkatirtha. Calcutta Sanskrit Series No.18-19. 2vols. Reprint, Kyoto, 1982. PrP: *Prakaraṇapañcikā of Śrī Śālikanātha Miśra with Nyāya-siddhi*. Ed. A. Subramaṇya Śāstrī. Varanasi: Banaras Hindu University, 1961. NSi: see under the PrP.

- 1) NVī, k.1: yathārthaṃ sarvaṃ eveha vijñānam iti siddhaye. prabhākaraguror bhāvaḥ samīcīnaḥ prakāśyate. 2) M. Hiriyanna [1926] : *The Mīmāṃsā View of Error*, Second Indian Philosophical Studies, vol.1, pp32-33. 3) NVī, k.27: śuktikāyā viśeṣā ye rajatād bhedahetavaḥ/ te na jñātā abhibhavād jñātā sāmānyarūpatā// 4) NVī, k.28a: anantaraṇ ca rajate smṛtir. jātā .../ 5) NVī, k.18: aparokṣapurovartisāmānādhikaraṇyataḥ/ neyaṃ smṛtiḥ, kintu śuktau bhrānto 'yaṃ rajatagrahaḥ/ 6) NVī, k.23: ya evārtho yasyāṃ saṃvidi bhāṣate/ vedyāḥ sa eva nānyad dhi vidyād vedyasya lakṣaṇam/ 7) NVī, kk. 28b-29abc: tayāpi ca/ manodoṣāt tad ity aṃśaparāmarśavivarjitam// rajatam viṣayīkṛtya naiva śukter vivecitam/ smṛtyā ...// 8) NVī, kk.33cd-37ab: grahaṇasmarāṇe ceme vivekānavabhāsinī// samyagrajatabodhāt tu bhinne yady api tattvataḥ/ tathāpi bhinne nābhāto bhedāgrahasamatvataḥ// samyagrajatabodhaś ca samakṣaikārthagocaraḥ/ tato bhinne abudhvā tu smaraṇagrahaṇe ime// samānenaiva rūpeṇa kevalam manyate janaḥ/ aparokṣārthabodhena samānārthagrahaṇa ca// availakṣaṇyasamvittir iti tāvat samarthitam/ 9) NVī, kk.37cd-39ab: vyavahāro 'pi tattulyas tata eva pravartate. samatvena ca saṃvitter bhedasyāgrahaṇena ca. mithyābhāvo 'pi tattulyavyavahārapravartanāt. rajatavyavahārāmśe viśaṃvādayato narān. 10) 丸井浩[2000] : 「Jayanta Bhaṭṭa と Vācaspatimiśra の先後関係をめぐって」, 『江島恵教博士追悼論集：空と実在』, pp.441-461. 11) NM, NVTṬ の他に PrP の註釈である NSi にも, NVTṬ と類似した分類が見られる. NSi, p.52, l.6.: jñānāyora arthayoś ca bhedāgrahāt. 12) Lambert Schmithausen, *Maṇḍanamiśra's Vibhramavivekaḥ mit einer Studie zur Entwicklung der Indischen Irrtumslehre*, 1965, Wien, Österreichische Akademie der Wissenschaften.

〈キーワード〉 *Prakaraṇapañcikā*, bhedāgraha, akhyāti, 誤知

(東京大学大学院)